

## 巻頭言 「静かなばらよ」

宇野 元

小平の小さな庭では、面白い名前のばらをいくつか育てました。そのなかに、ランブリングレクターというつるばらがあります。ランブリングは、ぶらぶら歩くこと。また、とりとめのない長話を意味します。レクターは英国国教会の牧師をさしますから、「ながい説教をする牧師」。実際にモデルがいたにちががなく、その搜索はなかなか興味深いテーマですが、残念ながら特定されていません。それらしい人は何人もいますが……

このばらは、シェイクスピアの時代から知られています。可憐な白い花と、ごつい枝。清楚と野趣の不釣り合いが大きな魅力です。開花の時期になると、ミツバチが群がってブンブン音を響かせます。鋭い棘も野性味をひきたたせます。しかも、私は冬の剪定の際に手袋をはめないため、手と腕を傷だらけにするのですが、このばらの棘はいわゆる邪悪なタイプで、刺されるときれいに抜くことができず、棘の先端が皮膚の中に残ってしまいます。

ある日のこと、家内が、長女と電話でおしゃべりしたあと、悲しい知らせを告げました。がっかりしないように。ランブリングレクターが枯れたらしい。ああ、あの野性的なばらが。それでいて、おもえば、とても奥ゆかしいたたずまいのばらだった。ハチたちが周りを騒がしく飛んでいても、静けさを湛えていた。美しい緑の葉がよく繁り、真夏の日盛りに陰をつくってくれた。

「静かなばらよ」と、ヘルダリーンがうたっています。気高い言葉を残した詩人を、もう一人のばらの詩人として思い出します。彼の作品のひとつに、ばらが強風に痛めつけられる姿を自分と重ねて描いたものがあります。

嵐が、おまえと私を裸にする  
だが、永遠の芽がほころびる  
まもなく新しい花が咲くまで

静かで、気高い。そして苦難がある——それは、イエス・キリストとどこか重なるように思われます。御父は御子に苦難をなめ尽くさせ、勝利を与えられた。私たちが痛みを負うとき、その歩みを思い起こすように。挫折しても、倒れても、なお望みがあることが、イエス・キリストにおいて証しされています。世の苦難を体験するすべての人が、この方をよりどころとするように。